

〈研究ノート〉

冠詞の総称用法再考：英語とフランス語の用法から

関 口 智 子

Reconsideration of Generic Use of Articles: Usage in English and French

Tomoko SEKIGUCHI

要 旨

本稿では、まず英語とフランス語における冠詞の総称表現について概観する。両言語において、総称の意を表すのにそれぞれ複数の表現が可能であるが、すべて同じように用いられるのか、またはニュアンスや用法に違いがあるのかを先行研究をもとに明らかにしていく。さらに、英語とフランス語における総称用法を比較し、両言語で全く一致しているのか、または食い違いが見られるのかについて考察する。総称の概念については、松原（2009）にならい、「内包」（属性）および「外延」（同様の内包をもつ個物）という2つの視点を採用する。最後に、両言語における総称用法のズレに関する1つの説明の可能性について言及する。

キーワード：冠詞 総称 英語 フランス語

Summary

The paper first reviews generic use of articles in English and French, where more than one expression is possible to express generic meaning of nouns. The paper then demonstrates, based on previous studies, whether the expressions can be used all the same in both languages, and whether there is any difference in nuance and usage. In addition, the paper compares generic uses and sees consistencies and discrepancies in English and French. The author follows the concept of “generic” proposed by Matsubara (2009) and adopts two perspectives of generic: “intension” (attribute) and “extension” (individuality with similar attribute). The paper finishes up with touching on a possible explanation for discrepancies in the generic use between the two

languages.

Key words: article, generic, English, French

I. はじめに

正保（2014）は、次の英語の2例を上げ、前者を個別表現、後者を総称表現と呼んでいる。

(1) A dog came running toward me.

(2) A dog is a vigilant animal.

どちらの文にも不定冠詞単数の A dog が用いられているが、(1)では「ある一匹の犬」、(2)では「犬という動物の習性」について記述している。(2)に見られるように、いわゆる「種族全体を表す言い方」は「総称」(generic) 表現と呼ばれている。織田（2007）は、「種類代表」表現という用語を用いているが、本稿ではより一般的な「総称」という用語を使用する。

松原（2009）は、「総称」の概念を「内包」と「外延」に分けている。内包は、名詞の示すものの属性で、例えば「犬」という概念は、ペットとして飼われる、飼い主に忠実である、鋭い嗅覚をもつなどの属性（内包）を持っている。また、同様な内包をもつチワワ、柴犬、レトリバーなどの犬種の個物（外延）を含んでいる。本稿では、松原（2009）にならい、総称表現を内包または外延を表すものととらえることにする。

通常、英語の総称表現として、不定冠詞単数 “a + 単数形”、定冠詞単数 “the + 単数形”、そして不定冠詞複数 (= 無冠詞複数) “Ø + 複数形” の3通りが知られている。しかし、どれもほぼ同じだと仮定し、無作為に1つを用いると誤用につながることもある。次の3例のうち「読書が好きだ」の意味で使えるのは(5)だけである。

(3) I like reading a book

(4) I like reading the book.

(5) I like reading books.

(3)はある一冊の本、(2)はある特定の本を読むのが好きという意味に解釈され、趣味としていろいろな本を読むという総称の意には解釈されない。しかし、以下のように3通りの表現がすべて可能な場合もある。

(6) A tiger is a dangerous animal.

(7) The tiger is a dangerous animal.

(8) Tigers are dangerous animals.

3通りの表現が可能な場合、個々の表現にどのようなニュアンスの違いがあるのだろうか。本稿は、個々の総称表現の違いを探るとともに、英語以外の言語としてフランス語の総称表現にも焦点を当てる。両言語に共通の使用傾向が見られるのか、またはどのような違いが見られるのか、比較し考察してみたい。

Ⅱ. 英語における総称表現

(1) 英語における冠詞表現のタイプ

英語では、冠詞を用いた表現として以下の4通りの形について考察する¹。通常、総称表現に用いられるのはa) 不定冠詞単数“a + 単数形”、b) 定冠詞単数“the + 単数形”、そしてc) 不定冠詞複数 (= 無冠詞複数) “∅ + 複数形”の3つとされている。

- | | | |
|---------------------|-----------|--------------|
| a) 不定冠詞単数 | a + 単数形 | 例：a tiger |
| b) 定冠詞単数 | the + 単数形 | 例：the tiger |
| c) 不定冠詞複数 (= 無冠詞複数) | ∅ + 複数形 | 例：tigers |
| d) 定冠詞複数 | the + 複数形 | 例：the tigers |

I. で紹介した3つの総称表現に関して、英語ネイティブスピーカーであるセイン(2014)は、以下のような解釈の違いがあると説明している。

- | | |
|---|---------------------------|
| (6) <u>A tiger</u> is a dangerous animal. | トラというものはたくさんの危ない動物の1つだ(?) |
| (7) <u>The tiger</u> is a dangerous animal. | トラなるものは危険な動物だ(?) |
| (8) <u>Tigers</u> are dangerous animals. | トラは危険な動物だ |

まず、ネイティブスピーカーは(6)の a tiger という表現に、トラを見たことがない人が遠くから俯瞰している、図鑑を見ながら言っているような響きがあると言う。一方、(7)の the tiger は、「偉大なるトラ」という含みがあり、親が子供に「トラという偉大な動物は危ないんだ」と論じているイメージを抱くと言う。(8)が、ただ単に「トラは危ない」というメッセージを伝える最も自然に感じられる表現だとされている。セイン(2014)は、ネイティブスピーカーの視点からすると、最も「自然な英語」は(8)であるが、他の2つの表現も「状況が異なれば使えなくもない」

と言っている。そのために、(6)と(7)の解釈の後ろに？がつけられているのであろう。

上記が英語のネイティブスピーカーの感覚であるが、では、英語の文法書、研究書では、どのような説明がされているのであろうか。ここでは、主に正保（2014）の解説を紹介していく。

（2）各冠詞表現の特徴

a) 不定冠詞単数 a + 単数形

まず、不定冠詞単数 “a + 単数形” について概観する。不定冠詞単数は、種類・種属の中の任意の1つを表すのが基本とされる。ここで、先ほどの例を検討してみよう。

(6) A tiger is a dangerous animal.

正保（2014）は、ある任意のもの（この場合はトラ）について言えることは他のトラについても言える、従ってトラ全般の習性を表す表現になると説明している。つまり、「個別表現が総称表現に拡大された」と考えられる。この表現は、ある種類のうち1つを取り上げ、その個体について言えることは同種類・同種属のほかの個体についても当てはまるという発想である。この場合の a は、any や each に近い用法である。無差別に、任意に選ばれたどんなものでもよいのであるから、総称という概念につながる。そのため、1つの個体についての記述は可能であるが、種類全体についての記述はできないとされる。以下の例はこれを端的に示している。

(9) An adult porpoise is six feet long.

(10) *A dodo is extinct now.

(11) *Asia is the home of a tiger.

(10) の「～は現在絶滅している」や、(11)の「～の生息地である」のような記述は、種類・種属全体に関する記述のため不定冠詞 a / an を用いることはできない。正しくは、(12) (13)のように定冠詞 the を用いるか、(14) (15)のように無冠詞複数を用いなければならない。

(12) The dodo is extinct now.

(13) Asia is the home of the tiger.

(14) Dodos are extinct now.

(15) Asia is the home of tigers.

正保（2014）は、不定冠詞単数は、単語の意味の説明や定義によく使われるとし、以下の2

例を挙げている。

(16) A sphinx is a fabled monster.

(17) A minuet is a triple-time French country dance.

b) 定冠詞単数 the + 単数形

では、次に定冠詞単数“the + 単数形”の総称用法を見てみよう。織田（2007）によれば、定冠詞の機能は、不定冠詞や無冠詞複数に内在化された「個別具体性」を少しでも中和または消去し、普遍抽象的な概念表現に転じさせることだとされている。既出の松原（2009）の用語を借りれば、定冠詞単数は、属性（内包）に注目した表現、抽象的な取り上げ方ということができる。一方、正保（2014）は、これを「同種のものの中から特定のものを指す」という定冠詞の機能が、総称用法では「個体」のレベルではなく、「種類」のレベルで特定していると説明する。世の中には犬は何匹でもいるが、「犬」という動物の種類は1つだからである。正保（2014）は、さらなる細分化が可能な例として、犬種の総称用法を挙げている。

(18) The terrier is a small active dog of a type originally used for hunting.

(19) The Kelly blue terrier is a good retriever and herder.

(18)では、犬という動物の中で1種類しかいない「テリア」という犬種を、(19)では、テリアという犬種の中で1種類しかいない「ケリーブルーテリア」という犬種を特定している。ここでもやはり、文脈でも明らかのように、それぞれ取り上げられた犬種の属性に焦点があてられていることがわかる。

さらに、織田（2007）は、定冠詞の総称用法には対照概念が不可欠であると言う。以下の例では、他のものとの区別、対比が強く意識されている。

(20) in the east, in the summer, in the morning, in the dark, on the left

それぞれ、「西」に対して「東」、「他の季節」に対して「夏」、「他の時間帯」に対して「午前」、「明かり」に対して「暗がり」、「右」に対して「左」という識別が行われている。同様に、楽器名に関しても、“play the piano”という際には、the violin, the flute, the trumpet など他の楽器のリストを想定せずしては、この表現は使えないとされる。こちらの例でも、名詞の示す内包において比較対照が行われている。バイオリンではなくピアノを弾くという場合、個々のピアノの具体像をイメージしているのではなく、白黒の鍵盤をたたき、ペダルを踏んで音を出す重厚な楽器というピアノの属性を思い描いているのである。

c) 不定冠詞複数 (= 無冠詞複数) Ø + 複数形

次に、無冠詞複数の用法を見てみよう。無冠詞複数は、通常総称としての種類・種属ではなく、種類・種属のメンバー全体、個々の総和を指すと言われる。猪浦（2016）の言葉を借りると、「漠然とした複数個による提喩」である。真の総称とは言い難いにもかかわらず、この形は口語で頻繁に用いられる傾向にある。不定冠詞単数が a / an により任意性を表したり、定冠詞単数が the により属性に注目したりするのに対し、無冠詞複数にはそもそも冠詞がない。正保（2014）は、冠詞がないことにより冠詞独自の意味に依存せず、それによる意味的制約もないために、総称表現として用いられやすいと説明している。

正保（2014）は、無冠詞の指す対象の範囲は本来定まっていないため、総称的に解釈されるのは、文脈により種類全体を表す場合であるとし、以下の3例を比較している。

- (1) Elephants like peanuts.
- (2) Elephants like a peanut.
- (3) Elephants like the peanut.

主語 Elephants は3例とも総称用法で共通であるが、(1)のみ「象はピーナツが好きだ」という意味を表しうるといふ。(2)は、「1粒のピーナツ」または「ある品種のピーナツ」が好きだと解釈される。(3)は、定冠詞 the によりピーナツの属性に注目した総称表現という解釈は不可能ではないが、限定用法の「特定のそのピーナツ」が好きという解釈の方が優勢である。

d) 定冠詞複数 the + 複数形

最後に、定冠詞複数“the + 複数形”についても概観しておこう。定冠詞複数は、後述する特殊な場合を除いては、総称的には用いられないとされる。英語では、定冠詞が名詞の複数形を従え、特定化されたグループの構成員に限定するからである。例えば、定冠詞複数“the tigers”は、「トラという動物」一般ではなく、文脈上聞き手（読み手）に明らかな複数のトラの集合体を表わす。定冠詞複数が総称的に用いられる特殊な場合とは、国民性の総称表現および事典や図鑑の種類・種属の記述である。

まず、国民性の総称表現として、正保（2014）は the Normans、the Danes、the Romans、the Carthaginians などを例にあげ、複数の民族を比較対照する場合に用いられるとしている。同じ国民性の総称表現でも、無冠詞複数と定冠詞複数ではニュアンスが異なる。

- (4) Hungarians liberated Cardinal Mindszenty, who took refuge in the United States Legation.
- (5) The Hungarians fought alone and were crushed by the Russians.

「一般的な総称表現」とされる無冠詞複数の(24)は、複数のハンガリー人が枢機卿を解放したという意味で、国民全体で行動したという意味合いはない。それに対し定冠詞複数の(25)は、国として国民全体が撃破されたという含みがあるという。この点をさらに補強するのが、織田（2007）の下の例である。

(26) Fins are fond of sports.

(27) The Fins are fond of sports.

定冠詞複数の(27)は、無冠詞複数の(26)と比べて、まとまりの意識が強く、個人的例外は存在しないという読みができると言う。また、(27)には、フィンランド人の他に、スウェーデン人やロシア人など比較の対照となるグループの想定が前提となっているとされる。

さらに、定冠詞複数は、学術的科学的な記述の文体として用いられることがある。正保（2014）に、以下の例が挙げられている。

(28) Owls cannot see well in the daytime.

(29) The owls have large eyes and soft plumage.

上の2例はどちらも総称表現であるが、(28)の無冠詞複数の指す対象が漠然としているのに対し、(29)の定冠詞複数には、フクロウという鳥類を他の鳥類と区別する意味がある。そのため、定冠詞複数は百科事典や図鑑など、動植物を下位区分して他種類・種属と対比する際に使用される。各巻の見出しには、The Plants、The Fishes、The Birds のように the をともなった複数形がよく用いられると言う¹⁴。

“the＋形容詞”の形も総称表現として使われることを補足しておく。国民全体を表すのに、the English、the British、the French、the Dutch、the Swiss、the Irish のように、定冠詞 the が形容詞についた表現がよく用いられる。その他、the elderly、the rich、the poor などの表現は、形容詞の表す特徴をもったグループ全体を表す。この場合、名詞的に使われている形容詞は複数形を取らないが、複数の概念を表わしている。

以上、英語における冠詞の総称用法を総括すると、通常、総称表現として用いられる形は、a) 不定冠詞単数 “a＋単数形”、b) 定冠詞単数 “the＋単数形”、c) 不定冠詞複数 (= 無冠詞複数) “∅＋複数形” の3つであるということが確認された。a) は種類・種属の中の任意の1つを取り上げ、b) は種類・種属の属性を引き出し、c) は種類・種属のメンバーをまとめてとらえるという視点の違いがあることが明らかになった。

Ⅲ. フランス語における総称表現

(1) フランス語における冠詞表現のタイプ

次に、フランス語における総称表現を概観してみよう。フランス語では、冠詞を用いた表現として以下の4通りについて考察するⁱⁱⁱ。通常、最後のd) 不定冠詞複数を除く3つの表現が総称表現として用いられるとされる。

a) 定冠詞単数	le (la) + 単数形	例：le tigre
b) 定冠詞複数	les + 複数形	例：les tigres
c) 不定冠詞単数	un (une) + 単数形	例：un tigre
d) 不定冠詞複数	des + 複数形	例：des tigres

まず、定冠詞に関して、朝倉（1978）『フランス語文法事典』には、5つの用法中3番目に「総称的意味を表わす」とあり、数々の例文とともに詳細な記述がある。一方、不定冠詞は7つの用法中5番目に補足的に触れられているにすぎない。「不特定な一個体が同種属の他のすべての個体を代表することがある。この場合、不定冠詞は総称を表わし、定冠詞を用いても意味の変わりはない」と記されている。同様に、松原（2009）も「総称は普通、定冠詞で表わされる」とし、補足的に「総称は不定冠詞で表わされる場合がある」と述べるにとどまっている。では、フランス語では上の4つの表現にどんな特徴があるのか、総称表現として用いられない場合はなぜなのかについて探っていく。フランス語では、総称用法の主流とされる定冠詞形の考察から始めることにする。

(2) 各冠詞表現の特徴

a) 定冠詞単数 le (la) + 単数形

松原（2009）は、ある名詞が示す概念について、内包と外延どちらを表しているかは、冠詞によって示されると言う。では、以下の定冠詞単数と複数を比較してみよう。

- (30) Le cheval est un animal. 馬は動物である
 (31) Les chevaux sont des animaux. 馬は動物である

松原（2009）によれば、2例とも同じ意味であるが、単数形の(30)は馬の「属性」（内包）に焦点を置いた抽象的なとり上げ方、複数形の(31)は実際の馬の「集まり」（外延）に目を向けた具象的なたり上げ方であるとされる。

同様な例として、松原（2009）は、l'homme と les hommes、la chute d'eau と les chutes d'eau を挙げている。定冠詞単数 l'homme は「一般的な人間」、一方、定冠詞複数 les hommes は「人間社会、人間同士の関係」を表すとある。また、定冠詞複数 les chutes d'eau が、「水の落下現象」を外延的に見て、その具象的現れの「滝」を表しているのに対し、定冠詞単数 la chute d'eau は「水の落下現象」をその属性の方に重きを置いて抽象的に見ている。前者では、滝を1つ、2つと数えることができるが、後者ではそれはできない。以上のことから、フランス語では定冠詞単数は、英語の定冠詞単数同様、抽象的な内包的総称を表すという点で一致している。

b) 定冠詞複数 les + 複数形

前節で、フランス語の定冠詞複数外延的総称を表すことがわかったが、ここでは外延的考え方についてとり上げる。松原（2009）によれば、外延的考え方は、その構成分子間それぞれの差が大きい時に容易に行われ、その結果、普通は複数形を取らない物質名詞でも種類を設定するときは複数形を取ることが可能とされる。たとえば、sel（塩）は通常複数形を取らないが、食塩、燐酸カルシウム、炭酸石灰など「塩類」を指す場合には、les sels と複数形として用いられる。内包的総称 le sel の外延にいろいろな種が生じると les sels となるのである。また、松原（2009）は、le sable（砂）と les graviers（砂利）に関して、物質名詞の「砂」は、構成分子である砂粒は無視されているため単数、一方「砂利」は、その構成分子である砂粒より大きい小石が意識されているため複数を用いられているのではないかと推察している。

次に、以下の種別表現における定冠詞の単複の使い分けを考察してみよう。

l'homme（人間） les animaux（動物） les végétaux（植物） les mammifères（哺乳類）

動物、植物、哺乳類が複数なのに、なぜ人間だけが単数なのだろうか。松原（2009）は、動物や植物と人類では、その構成分子の性格が異なるからだとしている。動植物には、種々の下位単位が存在するが、生物学的に人類の下位単位は存在しないため、les animaux と l'homme のような取り扱いの差が生じたと分析している。

定冠詞複数外延的総称が、最も多く用いられるのは生物学の術語とされている。例えば、les reptiles（爬虫類）は、必ず複数で用いられるが、その理由を松原（2009）はこう説明している。蛇とカメのように形態的に非常に異なるものを既成の1語で表そうというのは無理があり、新しい名称が必要になり、その時強制的に複数の形が出てくると言う。これは、厳密な命名が不可欠な科学の領域では当然であろう。蛇やカメなど爬虫類の種々の属性を持った le reptile と呼べる単体の動物は、現実には存在しないからである。

最後に、松原（2009）からもう1つ同様の例を挙げよう。langue は、ある社会に属し独自の文法と語彙をもつ話し言葉であるとされる。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル

語などはラテン語から変化した langues であり、これらの言語は総称して les langues romanes (ロマンス諸語) と呼ばれる。これに定冠詞単数を使って、la langue romane と呼ぶことができないのは、la langue romane という名の言語は現実に存在しないからである。les langues germaniques (ゲルマン諸語)、les langues indo-européennes (印欧諸語) も同様の説明ができる。

c) 不定冠詞単数 un (une) + 単数形

では、次に不定冠詞単数が表しうる総称の概念を取り上げてみよう。不定冠詞 un は数詞としての機能の他に、次の2つの機能を持っている。松原(2009)の表現を借りれば、どんなものにも「無差別」に、あるいは「無選択」に用いられる用法である。ある名詞の表すものならどんなものでもよく、ひいてはそのものの全部にも適用される。もう1つは、無差別には適用されず、「差別」的にその名詞の表すものの中のある特定のものにだけ適用される用法である。ここで特定というのは、話し手にとってのみ特定で、聞き手にとっては未知のものであることが重要である。

2種の不定冠詞の用法で、総称用法につながるのは最初の無差別的物の見方である。これに関して、松原(2009)は直線の例をもとに説明している。1本の直線上に無選択に1点を取り、その点上である幾何学的証明が成り立つならば、その直線上のどの点でも同じ証明が成り立つ。それゆえ、ある直線上の1点は、その直線上のすべての点と同一に考えられると言う。松原(2009)の「どんなものでもよいということは、全部に通じることだ」という無差別的考え方は、英語の不定冠詞 a の任意性の概念と一致する。

では、不定冠詞単数を定冠詞単数と比較してみよう。松原は、le moyen と un moyen の違いについて、推定にすぎないがと前置きしながら、定冠詞の前者は「たった1つの方法」、不定冠詞の後者は、いくつかある方法の中の「その中の1つの方法」という違いがあると言う。また、ベルレーヌの詩の一部を引用し、以下のように解説している。

(32) Il pleure dans mon cœur	都に雨の降るごとく
Comme il peut sur <u>la ville</u> ...	わが心にも涙する…

松原(2009)は、上記の sur la ville は定冠詞が使われているが特定の町ではなく、任意の町を指すだろうと解釈している。定冠詞により、雨の降る悲しげな憂鬱なイメージの町を抽象的に思い描いており、もし une ville と不定冠詞を用いれば、ある特定の町だが名を出すのははばかるという意味になると解説している。

以上をまとめると、不定冠詞 un には、名詞が示すものが無差別に選ばれたものであるとき、総称の定冠詞 les に通じる働きがあることがわかる。un Français が「無差別に選ばれたフラン

ス人」、「フランス人ならだれでもよい」という意味の時は、les Français と同じ意味合いをもつ。しかし、不定冠詞単数は、既述のように差別的な限定として、特定のことを指す場合がある。そのため、総称用法の un が、文脈により特定のことを示すおそれのある場合には、un を避け、代わりに les を使用すると推測される。これが、フランス語において、不定冠詞単数の総称用法の頻度が少ない理由であろう。

d) 不定冠詞複数 des + 複数形

では、最後に不特定複数の用法を見てみよう。不定冠詞単数の un には任意のことを指す無差別用法と、特定のことを指す差別的用法があるが、松原（2009）は、前者の複数形が les、後者の複数形が des であると説明している。つまり、des をともなわれた名詞は、ある特定のグループを指し、総称の意では使えないのである。このことは、以下の松原（2009）による2組の例に示されている。

(33) J'adore les enfants. 子供が好きだ

(34)* J'adore des enfants.

(35) Je déteste les enfants. 子供が嫌いだ

(36) *Je déteste des enfants.

「子供が好きだ、嫌いだ」という場合は、一般に子供というものが好き、嫌いなわけであるから、一部の子供の集団を表す(34)、(36)の文は使えないのである。このフランス語の不定冠詞複数の用法は、英語の定冠詞複数 the + 複数形の用法と類似している。英語では、既に見たように、定冠詞複数は、国民や民族に関する記述や学術論文など特殊な場合に限られ、通常は特定のグループを指すと解釈される。

以上をまとめると、フランス語においては総称用法として、a) 定冠詞単数、b) 定冠詞複数、c) 不定冠詞単数の3つの形が可能であり、d) 不定冠詞複数はいられないことがわかった。

IV. 英仏語冠詞総称表現の対比

それでは、以下に英語とフランス語の冠詞の総称用法を意味のレベルで対比させてみよう。

種類・種属の属性と、その中からとり上げた任意の1つ、無差別に選ばれた1つを意味する場合には、英仏それぞれ同種の冠詞が対応している。しかし、種類・種属を個々の事物の総和として考える場合には、同じ複数でも、英語では不定冠詞（無冠詞）、フランス語では定冠詞を使用するという点が異なっている。例えば、フランス語で「私は猫が好きだ」 J' aime les chats を英

	英語	フランス語
種類・種属の属性 抽象化された概念	定冠詞単数 “the”	定冠詞単数 “le/la”
種類・種属の中の任意の1つ サンプルによる提喻	不定冠詞単数 “a”	不定冠詞単数 “un/une”
個々の総和	不定(無)冠詞複数 ∅	定冠詞複数 “les”

語に逐語訳すると、I like the cats となるが、そうではなく I like cats と言わねばならないのである。

最後に、なぜ英語では漠然とした複数個を表す無冠詞複数が総称表現として用いられ、一方、個体の全集合を表す定冠詞複数が通常総称表現として用いられないのだろうか。これに関して、猪浦(2016)の興味深い分析を紹介する。英語で定冠詞複数が総称用法として用いられにくい理由がこう説明されている。複数名詞に定冠詞がつくことは、「世界中に存在するその名詞が示す全集合である」と考えられる。建前を好むラテン民族にとっては、総称を表すまさにぴったりの表現であるが、経験論を重視する英国人は、ひとつの例外も許さない堅苦しさを嫌い、「一生の間に全ての猫について確認できるわけではないから、概してそういうものだ」という余裕を持った意味を醸し出すために、定冠詞のない形を好むというのである。そのため、英語でも、例外を許さない全集合として認識されるなら、the + 複数形が可能となる。それは、すでに見た国民や民族に関する記述や、科学技術論文での使用である。また、無冠詞複数は、観念的な考え方を好むフランス語などラテン民族の言語では、決して総称表現として用いられることはないと言われる。一方、漠然とした複数個を総称とみなすのは、現実的な考えを好む英語、ドイツ語などゲルマン民族にはなじんだ考えとされているようである。

V. おわりに

本稿では、英語とフランス語における冠詞の総称用法を概観し、原則として両言語に3通りの表現が可能であること、またその意味の違いや使い分けに関して先行研究をもとに考察した。これらの表現は、それぞれニュアンスが異なり、文脈や状況によって1つのみが適切な場合もあり、使用にあたり注意が必要である。また、英語とフランス語では3つの表現の使用について、食い違いがあることが確認された。

今後の課題としては、文における名詞の統語的位置(主語、目的語、補語など)および述語の種類(恒常的状態なのか行為を表すのか)の観点から、総称的解釈が可能な文法的制約について再検討が必要である。

(せきぐち ともこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

参考文献

- 朝倉季雄 『フランス語文法事典』 1955. 白水社
 一色マサ子 『冠詞』《英文法シリーズ》 1954. 研究社
 猪浦道夫 『英語冠詞大講座』 2016. DHC
 江川泰一郎 『冠詞・形容詞・副詞の用法』 1961. 研究社
 織田稔 『英語冠詞の世界』 2007. 研究社
 川本茂雄 『英語からフランス語へ』《フランス語<青春>文庫》 1963. 第三書房
 川本茂雄 『フランス語統辞法』 1982. 白水社
 小稲義男 『冠詞・形容詞・副詞』《現代英文法講座2》 1958. 研究社
 正保富三 『英語の冠詞がわかる本』 2014. 研究社
 セイン・デイビット 『ネイティブが教えるほんとうの英語の冠詞の使い方』 2014. 研究社
 新倉俊一他 『フランス語ハンドブック』 1978. 白水社
 松原秀治 『フランス語の冠詞』 2009. 白水社
 宮下真二 『英語文法批判』 1982. 日本翻訳家養成センター
 鷲尾 猛 『フランス語冠詞の話』《大学書林語学文庫》 1960. 大学書林

i 英語では、無冠詞単数“ \emptyset + 単数形”（例：tiger）の総称用法は、可算名詞では通常 man（「男」または「人間」の意）と woman（「女」の意）の 2 語に限られる特殊な場合とされるため、本論では扱わない。物質名詞や抽象名詞は、不可算という性質上“a + 単数”、“ \emptyset + 複数”、“the + 複数”の形はとりえず、“ \emptyset + 単数”または“the + 単数”の 2 つの可能性しかない。以下の織田（2007）の例文から、物質名詞の総称は、通常無冠詞で表されることがわかる。

- (1) Iron is a useful metal.
 (2) *The iron is a useful metal.

(1)では、「鉄というものは（どれをとっても）有用な金属だ」という解釈で、普通名詞であれば「任意性」を表す不定冠詞単数の用法に類似していると言える。

ii 定冠詞複数が他種類・種属との区別・対比を表しうることから、以下の文でなぜ「山」に定冠詞複数を用いられているか説明できる。

- (1) I like the mountains better than the sea.

織田（2007）によれば、無冠詞複数の mountains ですでに総称の意を表すのに十分であるが、定冠詞 the を使うことにより、さらに 1 つの区切られた集まりとして、「海」との対比が強く意識されていると言う。

iii フランス語で、無冠詞単数“ \emptyset + 単数形”（例：tigre）は、抽象的で具体性を欠いていることを表す。フランス語における無冠詞の使用は、通常以下のような場合に限られるため、本論では取り扱わない。フランス語の無冠詞名詞は、事物の具体的な色や形ではなく、機能や性質に注目する。例えば、J'ai froid「私は寒い」では froid が無冠詞名詞で使われているが、「寒気がする」という意味を表し、froid という語の抽象的意味が強調されている。同様な熟語に、J'ai faim「お腹が減った」、J'ai soif「喉が渴いた」、J'ai sommeil「眠い」などがある。その他、職業・国籍などを示す名詞が補語（フランス語では「属詞」）に来る場合は、Je suis japonais / japonaise「私は日本人だ」、Je suis étudiant / étudiante「私は学生だ」のように無冠詞となる。